

< 海外情勢 >

『緊迫する台湾と日中の関係』

【前編】

日中間に眠る「奥深い関係」を探る

米大統領選でバイデンの勝利が濃厚になると、世界に微妙な変化が現れてきた。

世界各地で抗争や対立の火種がくすぶり始めたのだ。

東アジアでは軍産複合体が仕掛ける「米中冷戦」の構図が強まっている。中国による台湾侵攻や尖閣諸島占領の可能性が語られ、東アジアの緊張は高まっている。日本は「米中冷戦」の最前線に立ち、中国を相手に緊迫状態を強いられるのだろうか。

菅政権の対中政策

トランプは米中関係の緊張を作りながら、一方で中国を強化し世界を多極化に向かわせていた。米国による一極支配ではなく、ロシア・中国・インド・ブラジルなど多くの国の手によって運営される世界を目指した。トランプのこの方針に寄り添っていたのが、安倍の日本だった。

安倍は緊密な日米関係を構築しつつ、裏ではトランプの意を理解して中国に接近し、東アジアの緊張を緩める方策を模索していた。軍産複合体の支援を受けたバイデンは、トランプが築こうとした多極化世界を否定し、世界全地域を対立関係に向かわせ、緊張を生み出そうとしている。

バイデンが中国の怪しげな勢力と繋がっていることは、多数の情報筋が明らかにしている。バイデンの息子ハンターと上海の石油系企業家葉簡明（ようかんめい）との密着ぶりや、杭州の総合企業万向（まんこう）集団との汚れた関係などだ。中国の暗部に急所を握られながら、バイデンは米中関係を緊張に導いている。「米中冷戦」を演出し、軍事対立が激突必至かのような緊張感を作り上げ、関係諸国を軍備増強に向かわせ、兵器産業を潤している。こうした世界情勢の変化に、「菅政権を継承する」と宣言した菅政権は、どう対応するのだろうか。

まるで二兎を追うような、複雑な動きを見せている。

安倍は2016年8月のアフリカ会議の席上で「自由で開かれたインド太平洋」という言葉を使って中国の海洋進出に歯止めをかけようとした。安倍が提唱したこの言葉に、トランプは乗った。このとき以来、米国だけでなく欧州諸国や豪州も「自由で開かれたインド太平洋」という標語を使うようになった。ところが次期大統領（候補）のバイデンは「この文言は踏襲しない。新たな言葉を用いる」としている。

そうした中、11月に開かれた「ASEAN関連首脳会議」で、菅首相が「平和で繁栄したインド太平洋」と発言したことが波紋を広げている。菅は安倍・トランプ路線を外れ、バイデンに寄り添おうとしているのかもしれない。

実際、菅は対中関係に厳しい言葉を連発し、豪州とは準安保体制を締結、初の外遊に中国包囲網の一翼を担うベトナムやインドネシアを選ぶなど、中国に敵対する雰囲気強めている。だがそうした中、11月末には中国の王毅外相の来日を積極的に受け入れ、話し合っている。菅はバイデンを裏切って、米国に隠れて中国と手を結ぶのではないのか。一部では、そんな情報も流されていた。

コロナ騒動の中、専用機で来日した王毅は、**菅首相・茂木外相・加藤官房長官・二階幹事長**と会談した。会談は、日中ビジネス関係者の往来や五輪協力、尖閣諸島海域での緊張緩和が話し合われた模様だ。特に尖閣海域に関して、王毅が「**一步も譲らない**」と主張したとされる。

外務省発表やマスコミ報道からは、これ以上の内容は不明だが延期されている習近平の国賓としての来日問題が俎上に上がったと推測される。だがここで、王毅来日の奥深い意味を読み解く必要がある。

日本と中国の奥深い関係

67歳の王毅は「**戦狼（せんろう）外交官**」の代表とされる。強い中国を背負って立つ強硬な外相というイメージが流布されており、実際今回の来日でも「**尖閣は中国の領土**」という習近平の主張を貫き通した。王毅は北京の一般庶民の子である。文化大革命が吹き荒れる時代に高校を卒業し、生産建設兵団という屯田兵の一員となり、文革後に外語大で日本語を学んだとされる。

その後、駐日大使館参事、アジア局長などを経て2004年から4年間、駐日大使を務めた。台湾の**馬英九（元総統）**や**蔣孝嚴（蒋介石の孫）**とも親しい関係にあり、中国と台湾を結ぶ貴重な人材の一人でもある。日本の一部評論家…特に右寄りの思想家たちは、王毅を日本と敵対する共産党中国の申し子のように分析しているが、王毅は非常に親日的な人物である。

王毅の親日ぶりに関しては、ウィキペディアも認めるほどだ。

王毅を理解するには、一世代先輩となる**唐家璇（とうかせん）**83歳を理解する必要がある。**唐家璇**は1978年に駐日大使館秘書となって来日。その後アジア局

副局長を経て 1988 年には駐日大使館公使として再来日。党中央委員となって 1998 年には外相に就任した。2011 年には訪中した**アイドルグループSMAP**と会見したこともあり、親日家として知られる一方で、日本と敵対する中国共産党の代表と見なされることもある。**王毅**は、正に**唐家璇**をなぞるような外相なのだ。

さて、ここで話題を一気に**第二次世界大戦以前**に戻す。

中国東北部に「**満洲**」という国が存在した。満洲国の首都・新京にあった国策会社が満洲映画協会、通称「**満映**」である。看板スターは**李香蘭**（山口淑子）。

昭和 49 年から平成 4 年まで参院議員を務めた女性だ。満映の運営は 1 人の理事長と 3 人の理事が行っていたが、実質的には理事長の独占だった。昭和 14 年から終戦まで、満映の理事長を務めたのは**甘粕正彦**である。

甘粕正彦は、関東大震災（大正 12 年／1923 年）の混乱時に左翼活動家の**大杉栄**を殺害した「**甘粕事件**」の実行犯とされている人物。3 名を殺害しながら、僅か 2 年で仮出獄して活躍するなど背後に陸軍の闇が感じられるが、その話は複雑なので省略する。**甘粕**は満洲事変やラストエンペラー溥儀の脱出逃走劇を仕組んだ人物としても知られる。繊細で神経質な男との評価もあるが、一方で世界全体を見渡し、東アジアの未来に高大な理想を掲げていた人物でもあった。

満映に入った**甘粕**が目をつけた若者がいた。熊本県の貧農の息子で、夢を抱いて満洲にやってきた**高野広海**という男だ。**甘粕**は**高野**の頭脳と度量に惚れ込み学費や生活費の面倒をみながら、高野を満洲の学校に通わせていた。

そして昭和 20 年の春が過ぎて夏を迎える。日本の敗戦が明確になった昭和 20 年初夏——正確な記録はないが、たぶん 6 月か 7 月初旬だろう…**甘粕**は**高野広海**を呼び寄せ、300 万円のカネを手渡した。

「このカネを毛沢東の八路軍に手渡し、将来の中国建国の資金に充てるように」。

当時の 300 万円は、現在価値にして 10 億円とも 20 億円ともいわれる。とんでもない大金だが、それより**甘粕正彦**は何故、**八路軍**（共産党軍）にカネを渡そうとしたのか。左翼活動家**大杉栄**を殺害し、日本国粋主義者の代表格でもあった**甘粕正彦**が中国の将来を考えるなら、**蒋介石**ではないのか。

甘粕がなぜ毛沢東・共産党軍に資金提供を行ったのか、本当の理由は判らない。中国の奥を知り尽くし、東アジアの未来に高遠な理想を抱いていた**甘粕**だからこそ、この判断ができたのだろう。**高野**は無事に八路軍に資金を手渡し、戦後になって中国共産党に入党している。その後、**高野**は日本共産党在外代表部細胞長として活躍。日本共産党とのパイプ役を務めた。さらに中国共産党で「**文化部**」を創設し、その重鎮となっている。その**高野広海**が、日本語や日本文化を教え込んだ男が、**唐家璇**であり**王毅**だった。**唐家璇**や**王毅**には、**甘粕**が抱いた東亜の理想像が伝わっていると考えるのが当然だ。

1949年10月1日に**毛沢東**が天安門に立ち、中華人民共和国の建国が宣言された。このとき3人の日本人が天安門に正式招待を受けている。3人のうち2人は天安門には出向かなかったが、残る1人、**久原房之介**は天安門で**毛沢東**と手を握りあった。

久原房之介とは、日立製作所・日産自動車・日立造船の創設者である。欠席した2人は**秋山定輔**と**鬼倉重次郎**。日本が敗戦した昭和20年(1945年)8月から1949年10月の中華人民共和国建国までの4年間に、**周恩来**は少なくとも3回、**秋山**と**鬼倉**を訪ね来日し国家建設の相談を行っている。現在の中国の奥深いところに日本人が関与していることを、現在の中国人…日本人の中に理解している者がどれほどいるだろうか。

中国では、例えば**胡錦濤**(前国家主席)は理解しているだろう。

平成20年(2008年)5月に来日した**胡錦濤**は、来日初日に日比谷の松本楼を訪ねている。当時の**福田首相**は、当初、**胡錦濤**が松本楼訪問を熱望したとき、その意味が解らなかつたらしい。**胡錦濤**の目的は、松本楼の専務(現社長)だった**小坂文乃**に会うことだった。**小坂**の祖父は**梅屋庄吉**。**梅屋庄吉**は明治末期に清国を倒すために立ち上がった客家のエース**孫文**に、数兆円ともいわれる莫大な資金を提供した人物。また松本楼は、**孫文**と**宋慶齡**の結婚披露宴が行われた場所でもある。**胡錦濤**は**梅屋庄吉**に関する資料などを求めて松本楼の**小坂**と会ったのだ。

日中の奥深い歴史の一端を理解していたのだ。

そんな**胡錦濤**であれば、**甘粕正彦**が共産党八路軍に提供したカネの意味や**高野広海**のことを知っていると考えて間違いない。では**習近平**はどこまで理解しているだろうか。それは推理の糸口もない。だが今日の**習近平**を見るかぎり、もしかしたら全く理解していないのかもしれない。

台湾と中国の奥深い関係

台湾は独立すべきか、中国に統一されるべきか。この難問に正答を出すことは難しい。特に現在の変質した**習近平**共産党政府を念頭に置くと、回答に窮する。

台湾には全人口の69%を占める**福佬**(ふくりょう)人と15%の**客家**・14%の**外省人**・2%の**先住民**がいる。大雑把にいうと、外省人と客家は「統一」志向が強く、福佬人の過半数は「独立」志向。先住民も多くは「独立」支持派。トータルすると微妙な数字になる。それが台湾の実情である。

台湾の中軸は**福佬人**だが、彼らの多くは17世紀に福建省から渡ってきた人々だ。**福佬人**は漢民族と分類されることが一般的だが、中国人だが漢民族ではないとされる場合もある。台湾は17世紀半ばの37年間、オランダの支配下にあった。その後、大陸で明王朝が滅び清王朝が成立したが、明の軍人だった**鄭成功**が台湾に渡り、オランダを追い出して**鄭成功**、息子の**鄭經**の国家を作った。

鄭氏政權時代とも呼ばれるが、明の亡命政權でもあった。**鄭成功**は「**開発始祖**」として今日でも台湾人の精神的支柱となっている。ちなみに「**開発始祖**」として台湾人に尊敬される**鄭成功**の母は日本人の**田川マツ**。**鄭成功**は長崎の平戸で生まれ、7歳まで平戸で過ごしている。福建省に出自を持つ**福佬人**の一部は、大陸中国と台湾が統一されることは必然と考えている。

ここに台湾問題の難しさの一端がある。鄭成功から250年後、強大な清王朝が終焉するときが来る。漢民族は「**清王朝打倒**」の夢を若き客家のエース**孫文**に託した。**孫文**の革命活動を支援したのは、前述の**梅屋庄吉**や**久原房之介**だけではなかった。**宮崎滔天**・**犬養毅**・**頭山満**・**佐々木到一**・**宍川敬一郎**などなど、実に数限りない日本人が、**孫文**による清王朝打倒を助けた。なぜ日本は**孫文**をそれほどまでに支援したのか。それは、わかりやすく分析すれば将来必ず起きる東洋対西洋の激突に備えて、東洋の動輪たる中国を確固たるものにするためだった。

孫文の思想は**蒋介石**と**毛沢東**・**周恩来**の2派に継承された。

狭量な日本人の一部には、**孫文**の思想は**毛沢東**や**周恩来**には継承されていないと考える者もいる。さらに日支事変・大東亜戦争を通して、日本が戦った相手は中華民国であり、共産党中国は無関係だと本気で思っている人々もいる。

孫文はソ連と共同で「**モスクワ中山大学**」を設立し、多くの中国人に共産革命を学ばせている。**蒋介石**の息子で後に台湾総統となった**蔣経国**も、モスクワ中山大学で学んだ一人である。また**孫文**夫人の**宋慶齡**は、共産党中国政府の副主席を務めている。**孫文**と**毛沢東**・**周恩来**との関係をひもとくには膨大な紙幅を要するので、今回は割愛するが、間違いなく**孫文思想**は共産党中国に継承されていた。

習近平共産党に今なお、それが継承されているかどうかは、判断が難しいところだが。

さて、話を元に戻す。**孫文**の思想は**蒋介石**と**毛沢東**・**周恩来**の2派に継承された。そしてこの2派が「**国共内戦**」という熾烈な武力戦を戦わせたのだ。

もともと**蒋介石**国民党と**毛沢東**共産党は敵対関係にあったが、1924年に**孫文**の指導により協力体制を組むことになった。だが**孫文**没後の1927年から両軍は全面戦争（内戦）に突入。1936年の「**西守事件**」と、その後の**日支事変**（日中戦争）の拡大により「**第二次国共合作**」が成立したが、日本の敗戦後に内戦は激化。

1945年8月末の米軍仲介による重慶会談もすぐに破綻し、中国全土は戦場と化した。この国共内戦の詳細は多くの書籍やネット上で調べることができるので、ここでは深く立ち入らない。重要なポイントは「**西守事件とは何か**」であり、1945年の日本敗戦後の「**国共内戦の真相**」である。

西守事件とは**蒋介石**が拉致・監禁され、首謀者の一人とされる**張学良**から「**共産党軍征伐の中止**」などを突き付けられた事件である。

周恩来や宋美齡（蒋介石夫人）らを交えた話し合いの結果、蒋介石は釈放され、国民党軍と共産党軍が戦闘を中止した。多くの歴史家は、蒋介石が脅され国共合作への道が作られたと分析している。この分析は間違っている。

日本敗戦後の中国で、蒋介石国民党軍と毛沢東共産党軍は、血で血を洗う熾烈な戦闘を繰り返した。蒋介石軍には戦前から米国による「援蒋ルート」という武器提供の道筋があり、蒋介石軍は絶えず豊富で最新式の武器兵器を手にした。

にも拘わらず、蒋介石軍は敗走に敗走を重ねることとなった。一体どうしてだろうか。西安事件も…日本敗戦後の国共内戦の真相も…謎解きは蒋介石にある。

蒋介石には戦前から「援蒋ルート」という支援システムがあった。

米英蘭が中心となった軍事支援である。米英蘭などから豊富な支援を受け続けた蒋介石は、こう考えた…このまま自分が勝利すれば、中国は未来永劫、西欧の手先になるだろう。それは許されるものではない…。

西安事件とは蒋介石が立案した計画であり、毛沢東・周恩来に自分の本心を伝えるための命懸けの芝居だった。それ故に、蒋介石は第二次国共内戦では、米国が供与する最新鋭の武器兵器を手つかずのまま放置して敗走し、共産党軍にそれらの武器兵器を譲り渡したのだ。敗戦を目前にした満映の甘粕正彦が、なぜ共産党軍に莫大なカネを渡したのか。その答えがここにある。

梅屋庄吉・犬養毅・久原房之介などは、なぜ…あれほどまでに孫文を支援したのか。中国が米英の尖兵となり、奴隷となることを阻止しようとしたのだ。全ては東亜の高遠な理想のためである。西欧合理を排し、東洋哲理を確立するためである。目先のカネや領土のことなど、頭の片隅にさえ微塵もない。

西欧合理は必ず破綻する。人類未来のためには東洋哲理を確立させる必要がある。そのためには日本が知恵とカネを出し、中国が動輪となって動く必要がある…。その長大な物語が今、大きな山場を迎えようとしている。

昨年（2020年）11月に中国国防大学教授の劉明福が『新时代中国強軍夢（新時代の中国の強軍夢）』という書を刊行した。習近平体制下における人民解放軍の位置づけを記した論文であり、ここには台湾統一の戦略と日程表が書かれている。

更にそこには、「米中激突の戦場は日本になる」とも記されている。

本記事の続編では、中国の歴史を俯瞰した上で、この書の意味を考えてみたい。以下、『緊迫する台湾と日中の関係【後編】』に…続く■